

佐伯史談

第五十号

「郷土研究」誌
通算第七十号

昭和四十四年三月十五日

佐伯史談 会

事務局 佐伯市大字稻垣宮藤護子 羽柴芳

感想

故里の春のよそおい

— 城下所より花の便り —

羽 柴 弘

佐伯にも春がやつて来た。西谷の西田師の塀の内から通りの上は高くさし出ている水蓮の蕾が目ごとにくらんで、既に千ラホラと白い花びらをのぞかしている。今年は何故か蕾の数が少ないようである。

一昨日山際を歩いた。山際にも白木蓮がある。一本は山中郎、一本は土屋邸。いずれも塀のすぐ近くで、道行く人の頭上近くに清浄無垢な白い大きな花びらを開いて春の来たことを告げてくれる。山中郎のほかなりの老木で、枯れて打ちかけている二本の幹をめぐって、数本の若い後継の枝が勢よく伸びて蕾をつけていて、却って趣き深い姿を示し、おたりの左、すまいと共に古い城下所の姿ととどめている。

山中郎は歴史を物語つてくれているほどの老木であるが、土屋邸は日人間で言えば壮年の姿である。樹勢まことに

旺んで高さも八米ちかく、枝條を数多く伸ばし、何十いれ何百という数の蕾をつけていて、満開の日、社観を思わすてくれる。既に春である。

梅はもう殆んど散

りはてて、今はこれにかわつて豊後梅の濃艶な花の姿をおちこちで見かけるが、然しこれは本来梅に比すべくもない。かつて私は古い友とかがあるが、梅は他のものもろの花水と異なり、花の色香は言はずもかな、蕾よ一枝よし、特に羊歯枯れを見せているその老いて曲つた幹のおもむき、姿すべてがよいものである。

本号内容

- 後援 故里の春のよそおい(羽柴弘)……一
- 發刊 佐伯藩幕政餘月(山田守之丞)……三
- 編輯 佐伯藩御役名及帝殿(平田幸市)……六
- 聲 白山妙理梅理貞泉記(高橋智)……七
- 研究 富長権規と御靈信仰(佐藤晋二)……九
- 之公く 壺田路の庵寺(岩田正城)……二
- 賞書 木立権記(高木嘉彦)……五
- 拍江巻(岩田善市)……一〇
- 探訪記 下久保・地所八幡山・下城を巡る……二
- 白坪の墓地を巡るの記……五
- 集案案内・賛助年附并後
- 新入会員紹介・会費領収
- 愛贈圖書・編集後記……一〇

本号折込

田原親興の和歌(平田幸市)……一〇

櫻やう、山桜、既に庭園の隅に蒔蒔してゐる彼等櫻や
実櫻（やくらみ）のやと全く問題にならな。

三月も二十日をすぎると、堅固の異黒沢の東光庵の櫻
が咲く。また漆井吉野のなかつたころの昔の人達は、花
の便りをもちおひて、四里の田舎道を遠くとせず、青山
の奥まで歩いて見に出かけ去るものである。櫻は盛實櫻
で、安山桜にちかく、うす緑のおか葉、わずかに薄紅と
ふくえ、左花の姿、そして感をもと、う左幹や枝のおもむき、
往年の大神は倒れたがその後徒よく成長して、時が来れば
萬葉の装いをもつて、やはり櫻に關する限り佐伯第一
に推されるべき名樹である。

旧藩時代から明治にかけて、お城下佐伯の人たちはよ
くここに杖を突いた。中馬子正の詩は、国木田独歩の文
に、さては西南戦争の際に（どうもこれは伝説らしいが）
野津少将が駒つた。

櫻の名所黒沢も、いざや一度は行き見て見ん
と歌に歌われ左歴史ある名樹、その黒沢東光庵の櫻は
らくもすむである。

これにくるべれば、清代峠の櫻も、津井公園の櫻も、ナ
ては岡の谷招魂所や三の丸の櫻は、いずれも恐んが深井
吉野で、花は多くつくか趣きか少ない。然し手廻り行け
ることや歴史物語が附随してゐるので、家族づれのピクニ
ックにふさわしい所、四月に入れば、すこもかなり賑わ
うことである。

長い冬ごもりの生活から開放されて、人々は戸外に春
光を求めて出る。私は毎年かならずとまゝつてよい、また
程々のままの谷の小徑を左どり杉林をぬけ、芽を吹きか
けてゐる急斜面の灌木をわけてのぼり、高くそびえてい
る山桜の幹をよじ登って、半ばに近く咲いてゐるその枝

を手折つて来ることにしてゐる。麩細を織葉、まっ白な
華辭の花のすつきりした形、それらを支えてゐるつやも
分な小枝の姿、花瓶に注いで床の間に置く座敷一ぱい
に華やかな春が女たちの方、一輪さしに小枝一つとさして
飾り棚に置くこと、茶の間に和気がたなよい、家族みんな
の顔に春のよるこぶが見えける。今年はまだである。

佐伯の春先づ城山に來り、
と独歩は城山を左たえてゐるが、私は正月以來しばらく
登つていない。早春の目を左まりに石垣のほとりの暖かく、
枯れ左葛草のにおいなどか思われる。本丸跡天守台のぼ
とりの黒い土には、もう草の芽が萌え出ようとしてゐる
にちかかない。城跡のそこかしこ、そこはかとなく春の
息吹がはじまつてゐるであらう。

大年前から三の丸、そして山際の通りから馬場通りに
かけては、城山と共に佐伯のほころべき歴史的女プロム
ナード（遊歩道）である。ここを歩いて近頃気にかがる
ことは、城下町の面影を最もよく残してゐるこの畧腰に、
ビロリやフエニツクスやヒマラヤシタやメダセコイヤ
が多く植えられて、日本古来の樹木の影がうすくやつて
いくことである。松の枯れ果てた今日では、佐伯小学校
の玄關脇の赤松など、まことに貴重な存在である。どうか
枯らさないでほしい。養賢寺にも貴重な一本がある。
亭々とそびえる銀杏、黒々としげる樟の杉、模れ相や
蜜柑や枇杷のような庭先の樹々、四時折々に見せてく
れる若葉め花や果実や、さては我が冬にかけての紅葉
や落葉する姿など、すてがたいおもむきと示してくれる。

かくの如く、おが故里、城下町佐伯は今も春の装いを
ほめてゐるのである。